

第58回 スポーツ愛好度の国際比較

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト（<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>）を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」（学術誌『国民経済』、2004年）、『統計データはおもしろい！』（技術評論社、2010年）、『統計データが語る日本人の大きな誤解』（日本経済新聞出版社、2013年）等。



はじめに

2020年開催予定の東京オリンピックに向け、スポーツへの関心が高まりつつある。今回は日本人が好んでいるスポーツと世界の諸国民が好んでいるスポーツとを比較してみよう。

スポーツ愛好度の国際比較のためには、共通の調査票で国際的に行われた調査が適している。世界価値観調査と並ぶ国際共同調査である ISSP (International Social Survey Program) は毎年テーマを替えながら調査を行っているが、2007年には余暇とスポーツについて調べている。各国の回答者数は1000票程度とそう多くないが、対象は主要国を含む34か国にわたっており、非常に貴重なデータを提供していると思われる。にもかかわらず余り紹介されることがなかったので、少し古くなつたが、ここで取り上げることとする。

この調査では、各国で行われているスポーツの種類をほぼ網羅した選択肢を設け、対象者が「どのスポーツをよくしているか」(択一回答)、また「テレビでどのスポーツをよく見るか」(二つまでの複数回答) について訊いている。今回は、この

設問に絞って結果を分析することにする。

日本人の好きなスポーツ

まず、比較の前提として、日本人がよくするスポーツ・よく見るスポーツについて図1に掲げた。対象者数が限られているので、マイナーなスポーツでは、回答者数がゼロになってしまう。例えば、アイスホッケー、ボート、フェンシングの回答者は、する方も見る方もゼロだった。図中ではアメフト、ラグビー、乗馬は、見る者はいるのにする者はいない。競技人口がゼロということはないのだが、調査の制約でそうなってしまう。回答者数の少ないスポーツでは、標本誤差は非常に大きいのである。日本のスポーツ行為者率だけであれば、この調査と比較にならないほど大きなサンプル(対象者 20万人) の社会生活基本調査(総務省統計局) の結果データの方が確かである。ただ、世界と比較するだけでなく、概観を得るために ISSP 調査の方が分かりやすいという側面もある。

よくするスポーツ(一つだけの回答) の上位3位はウォーキング、ゴルフ、フィットネスである。

スポーツというより、運動といった方が適切なものへの回答率が高いことが分かる。スポーツらしいスポーツとしては、ゴルフを別にすれば、野球、テニス、水泳、サッカーという順位である。

よく見るスポーツ（二つまでの回答）は野球、サッカー、バレーボール、格闘技、ゴルフ、アイススケートの順である。格闘技は日本の場合は相撲が中心となっている。

それぞれの比率の世界順位も掲げておいた。世界順位で目立っているスポーツは、よくするスポーツでは、ゴルフが世界1位、野球2位、テニス3位である。

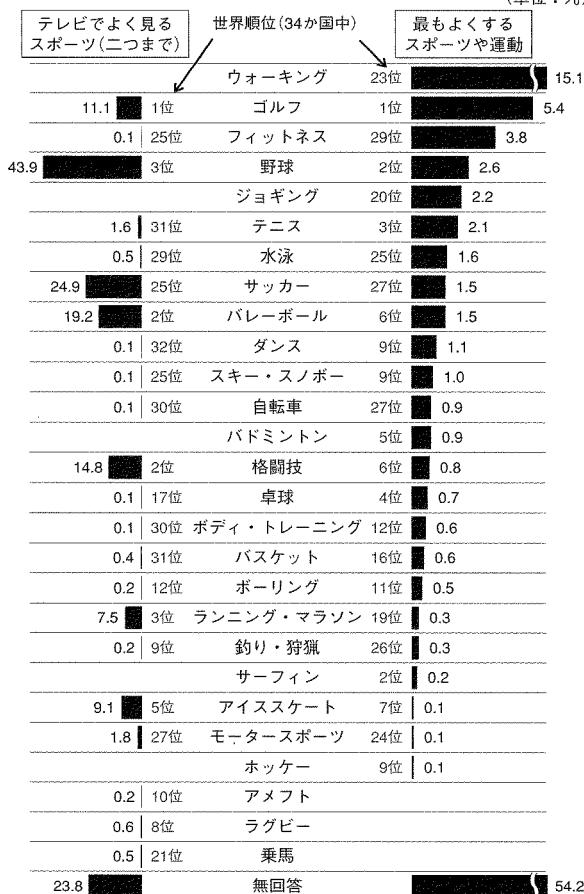
よく見るスポーツの世界順位で目立つのは、ゴルフが世界1位、バレーボールと格闘技2位が特に高く、野球とランニング・マラソンの3位も日本の特徴である。

後段で各国の愛好度ランキングの中の日本の位置を示すが、日本では、野球はするのも見るのも、回答率と世界順位の両方で高いスポーツである一方、サッカーは、野球ほどではないにしても、するのも見るのも回答率はかなり高いが、順位ではむしろかなり低い位置にあるスポーツである。世界全体では余り人気のない野球を日本人は特に好んでおり、世界的に人気の高いサッカーについては、日本人は嫌いじゃないが海外ほどは熱狂していないという状況なのである。

世界順位から、するのも見るのも日本で人気が高いスポーツとして格闘技も挙げられるが、この場合、する方は柔道や空手などの武道、見る方は相撲と、主たる内容が食い違っているだろう。

テニスは、何度かのテニス・ブーム（天皇陛下の美智子妃とのテニス交際や漫画・アニメの「テニスの王子様」など）を経て、するスポーツとしては日本人に人気が高いが、見るスポーツとしては余り人気がないという点が特徴のスポーツである。卓球にも似たところがある。ただ、この調査

図1 日本人のよくするスポーツ・よく見るスポーツ（2007年）
(単位：%)



注) 各国の全国原則18歳以上の男女が調査対象である。値はスポーツをしたり見たりしない人を含む回答総数(1,253人)に占める割合である。上から「最もよくするスポーツや運動」の比率の高い順。回答ゼロの場合はグラフと数値表示なし。無回答を除くスポーツをする人、見る人の割合はそれぞれ45.8%、76.2%である。

資料) ISSP「余暇とスポーツについての国際比較調査」

は先述のとおり2007年に実施されたものであり、今ではテニスの錦織圭選手のような世界トップを狙う選手が出てきているので、見る人気ももっと高まっているかも知れない。

世界順位的に見て、日本では、するのも見るのも余り人気が高くなかったスポーツとしては、自転車やモータースポーツが挙げられよう。

なお、この設問そのものの回答率（図注参照）から、日本人のスポーツ好きは、するというより見る方に特徴があることも分かる。

スポーツごとの 愛好度ランキング

図2では、各スポーツの愛好度の15位までの世界ランキングを掲げた。ここから日本人とスポーツとの関わりの特徴をさらに探ることができます。

野球を最もよくするスポーツとして挙げた比率が最も高いのは米国の2.9%であり、日本が米国に次ぐ高さとなっている。テレビでよく見るスポーツとして野球を挙げた比率では、ドミニカ共和国が89.6%と非常に高く、台湾、日本がこれに続いている。米国はメジャーリーグ（大リーグ）を有する野球大国であるが、野球場での観戦が多いことや他にもバスケットボールやアメフトなどがあるせいか、見ると野球の場合は、日本や韓国に次ぐ第5位(22.7%)とそう上位ではない。

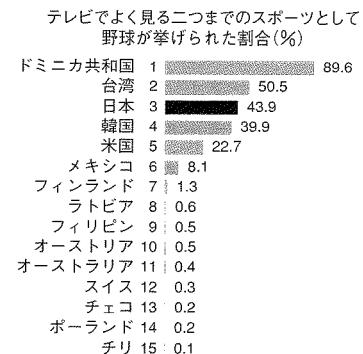
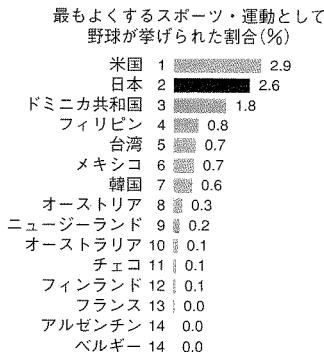
世界ランキングのグラフを見ると野球の場合、他のスポーツより、さかんな国が特定の地域に偏っていることが分かる。すなわち、米国文化圏や東アジア以外では、する人も見る人も非常に限られている。その中で、日本人の野球の愛好度はかなり高いのである。

ゴルフは、野球ほど限定的ではないが、ゴル

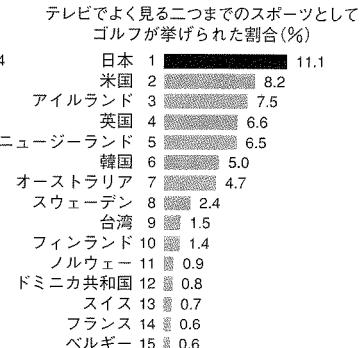
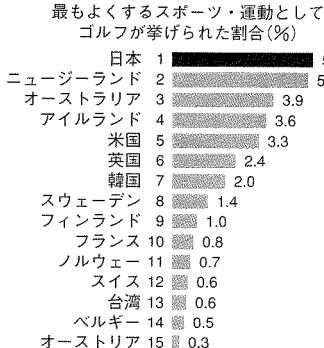
図2 スポーツ愛好度国別ランキング (2007年)

*国名の数字は調査35か国中の順位

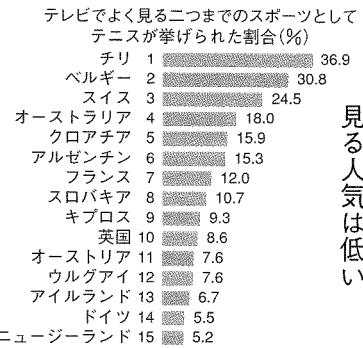
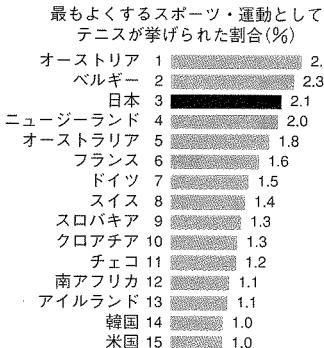
野球



ゴルフ



テニス



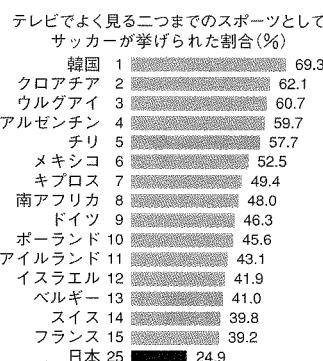
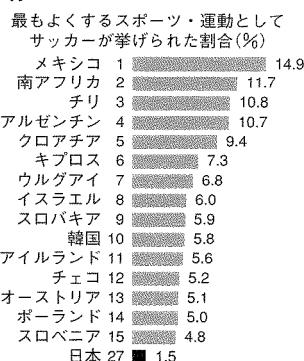
するのも見れるのも大人気

見る人気は高い

フを好きな国は英語圏諸国を中心に比較的限られている中で、日本の位置は、する方も見る方も堂々世界一である点で目立っている。日本の風土はゴルフ場の緑の維持に適しているとはいえないにとかかわらず、日本の会社社会に組み込まれた接

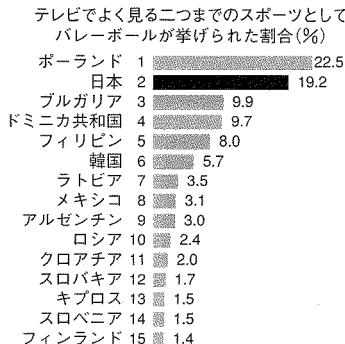
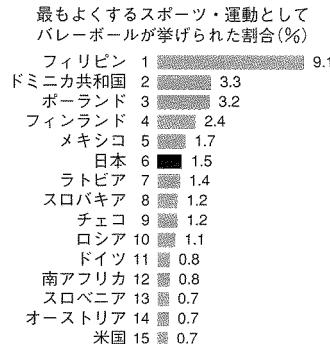
サッカー

世界的な地位は低い
人気スポーツだが

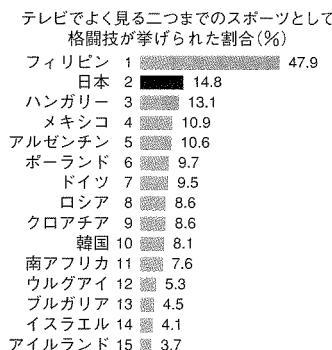
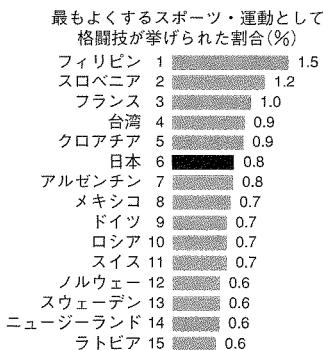


バレーボール

(する格闘技は武道見る格闘技は相撲) 人気があるが特に見る人気技はが高い



格闘技



注) 図の回答率の母数はスポーツ・運動をしない者、あるいはテレビで見ない者を含めた総回答数。ベルギーは フランドル地方のみ

資料) 図1と同じ

待ゴルフがさかんとなり、各種ゴルフトーナメントも開催され、世界で活躍する有力なゴルフ選手も存在してきたためだと考えられる。バブル景気時の乱開発のなごりで、プレイするゴルフ場が多い点もプラスに作用しているようだ。

サッカーは、日本では、野球に次いで人気のあるスポーツといえるが、世界的なランクでは、それほど高い愛好度とはいえない。というのも、サッカーは全世界的に最も人気の高いスポーツだからである。愛好度の世界ランキングを見ると中南米や欧州の諸国の人気度は日本を大きく上回っていることがうかがえる。東アジアでも、韓国は日本と比較にならないほどするのも見るもの比率が高くなっている。特にテレビ観戦率は世界一の高さとなっている。

バレーボールはする方で6位、見る方で2位と世界の中では日本の愛好度が比較的高いスポーツである。やはり、1964年東京オリンピックでの金メダルをとった「東洋の魔女」のレガシーであろう。テニスは、日本と異なり限られた階層のスポーツであるせいか、国際的なテニスの4大会

がある英米仏豪でもそれほど人気は高くない。格闘技は日本での人気も高いが、見るのも見るものフィリピンで愛好度が世界一である点が目立っている。